C 8

児童学研究における肯定の姿勢

お茶の水女大家政　　望月ま里

目的と方法　人間の世界の事象を把握し表現しようとする時、例えば子どもの顔が輝いている、輝いてくるなどのように「輝き」が手がかりとなる場合がある。「輝き」は人間の生きる力・エネルギーのほとばしりと対応しているものであり、人間が生活し活動する過程で様々に現れる。児童学の研究を進めるには、人間の今あるがままの、どのような存在の仕方も肯定される姿勢が大切である。本研究においては参加観察法（1981年度児童集団研究会木曜グループ他）により子どもの生活・活動のあるがままを見つめそこに「輝き」を見出し「輝き」の内容を考究すると共に、関係学のかかわり分析*をもとにその「輝き」がどのような状況において成立するかを明らかにする。**結果と考察**　「輝き」の状況は自己、人、ものの接在共存活動*が展開する状況であり、そこでのリーダーの媒介者的補助自我的かかわり方*が「輝き」を促進する。展開例❶ものを創る過程における輝き 経過 小4の児童が針金に石膏布を巻いて動物を作る。友人、教師からヒントを得て動物を立体的にする。石膏布は指に水をつけて滑らかにするとつなぎ目がなくなる、乾いてから着色するとにじまない等を自分で発見する。出来上がってみると足が太いのでろばに見たてる（予定では馬だった）。 分析考察 人を媒介に自己とものとの接在運動が展開する。その過程に発想の豊かさ、想像力、柔軟性、ユーモアが見られる。展開例❷集団遊びにおける輝き 経過 3才児集団で子どもとリーダーがくり返しボールを投げ合う。その後大きな袋に全員でボールを投げ入れる。 分析考察 ころがる、弾む等ボールの特性を生かして自己、人、ものの接在運動が展開する。

（論文指導；黒田淑子）引用参考文献＊松村康平「心理技術体系序説－かかわり分析（状況構造化）による考想」（所藤・松村・大村編『心理技術事典』朝倉書店1977）